佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第23集

長土呂遺跡群

HIJIRI HARA

聖原遺跡 I

長野県佐久市長土呂聖原遺跡 I 発掘調査概報

1990

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

例　　言

1　本書は、佐久流通業務団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の調査概報である。

2　調査委託者　　佐久市土地開発公社

3　調査受託者　　佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4　発掘調査所在地籍

長土呂遺跡群　聖原遺跡Ⅰ（ＮＮＨ　Ⅰ）

佐久市大字長土呂字上聖端、新城、下聖原、中聖原、上聖原

5　調査期間及び面積

平成元年４月10日～11月28日　　33000㎡

6　調査団の構成

事務局　　佐久埋蔵文化財調査センター

所　　長　　西沢　正巳

庶務係長　　畠山　俊彦

庶　務　係　　菊地　直美

飯沢　恵子

調査係主査　　高村　博文

調　査　係　　三石　宗一、小山　岳夫、小林　真寿、翠川　泰弘、

助川　朋広、神部　妙子（臨時職員）

調査団

団　　長　　黒岩　忠男（佐久考古学会副会長）

調査指導者　　白倉　盛男（佐久考古学会副会長）

林　幸彦（佐久市教育委員会）

須藤　隆司（佐久市教育委員会）

羽毛田卓也（佐久市教育委員会）

竹原　学（佐久市教育委員会）

調査担当者　　高村　博文

調査主任　　三石　宗一、小山　岳夫、小林　真寿、翠川　泰弘、助川　朋広

調　査　員　　井上　行雄（佐久考古学会員）

調査補助員　　神部　妙子、木島　美子（佐久考古学会員）、小林　幸子、宮川百合子、

（五十音順）　　和久井義雄（佐久考古学会員）

協　力　者
（五十音順）

秋山たけ、秋山みち子、秋山芳子、甘利　亘、荒井かつ、荒井ふみ子、有賀澄江、飯田すえの、飯田チヨ子、五十嵐勝吉、池田園子、池田その子、池田豊子、市川和子、市川恒男、井出愛子、井出つねじ、井出安生、今井みさ子、岩崎房江、上原あや子、上原幸子、臼田俊保、江原富子、大井キセ、小田川栄、小田川時江、尾沼けさと、金井　延、金沢花子、河合節子、木内明美、木内公子、樹沢三之助、高地正雄、神津啓子、神津節子、神津つる子、小林定男、小林立江、小林和儀、小林まさ子、小林満子、小山澄恵、斎藤義男、酒井豊子、佐藤節子、佐藤玉枝、重田文枝、篠原昭子、清水六郎、須江　慶、関口　正、大工原春巳、高橋かね子、高橋加代子、高橋　錦、高橋かをえ、高橋恒代、高橋のり子、高橋ふさ代、高橋ふみ、高橋冬子、高橋良市、滝沢澄子、武井とよ子、武井ミサイ、田中タツ子、田村祐子、角田しず江、角田すい、角田すづ子、角田　時、角田トミエ、角田まさ江、角田良夫、東城友子、徳田けさき、徳田代助、徳田英胤、樋田咲枝、中沢みどり、中山いつ代、中山たのし、中山弥太郎、中山雪子、成沢冨子、西川しづ子、西沢次男、畠山みち子、花里きしの、花岡美津子、原キミエ、原まき子、原田登里代、樋沢しづい、藤牧初枝、星野重一、星野保彦、堀籠滋子、堀籠みさと、村松とみ子、茂木とよ子、森泉欽一、森泉源治郎、森角せきよ、森川宗治、柳沢江い子、柳沢千賀子、柳沢ちなみ、柳沢豊志子、柳沢豊子、柳沢典子、柳沢八重、矢野きくえ、山浦とらじ、山口弘子、山崎　直、渡辺まさじ、渡辺吉治（以上　地元協力者）

青木あさ代、江口まさ江、小林とめの、小山林一（以上　シルバー人材センター）

有沢保晴、木内裕孝、小平富美江、小松威久男、成沢師弘、三浦洋崇、山崎博文（以上　大学生）

7　本書の編集は高村・三石が行い、執筆は調査担当者・調査主任が分担して行い、文責は文末に記した。また、第Ⅱ章遺跡の立地と環境は、佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第20集『南上中原・南下中原　上聖端』発掘調査概報と重複する部分が多いため、同書の内容を若干修正して掲載した。

8　本書は佐久市教育委員会の責任下に保管されている。また、聖原遺跡Ⅰの出土遺物等すべての資料は、現在、佐久埋蔵文化財調査センターにおいて整理・検討中である。

9　本調査において、長土呂区長神津義久氏ほか地元の方々には、発掘調査中数々のご協力およびご援助をいただき、また、調査概報作成にあたっては、下記の各氏よりご指導・ご助言をいただきました。記して感謝いたします。

青木一男、市川隆之、宇賀神誠司、臼田武正、大竹憲昭、岡村秀雄、河西克造、輿水太仲、小平恵一、小林秀行、近藤尚義、笹沢　浩、島田恵子、新海節生、堤　隆、寺内隆夫、寺嶋俊郎、花岡　弘、原　明芳、福島邦男、三上徹也、宮下健司、百瀬忠幸、森泉かよ子、由井茂也、綿田弘実

（敬称略、五十音順）

目　　次

例　言

第Ⅰ章　発掘調査の経緯……1

第1節　発掘調査に至る動機……1

第2節　調査日誌……2

第3節　発掘調査の方法……3

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境……4

第1節　佐久市長土呂付近の自然環境（地形と地質）……4

第Ⅲ章　基本層序……9

第Ⅳ章　調査の成果……10

第1節　検出された遺構・遺物……10

第2節　遺構の概要……11

1）　竪穴住居址……11

2）　掘立柱建物址……12

3）　土　坑……12

4）　粘土坑……12

第3節　まとめ……17

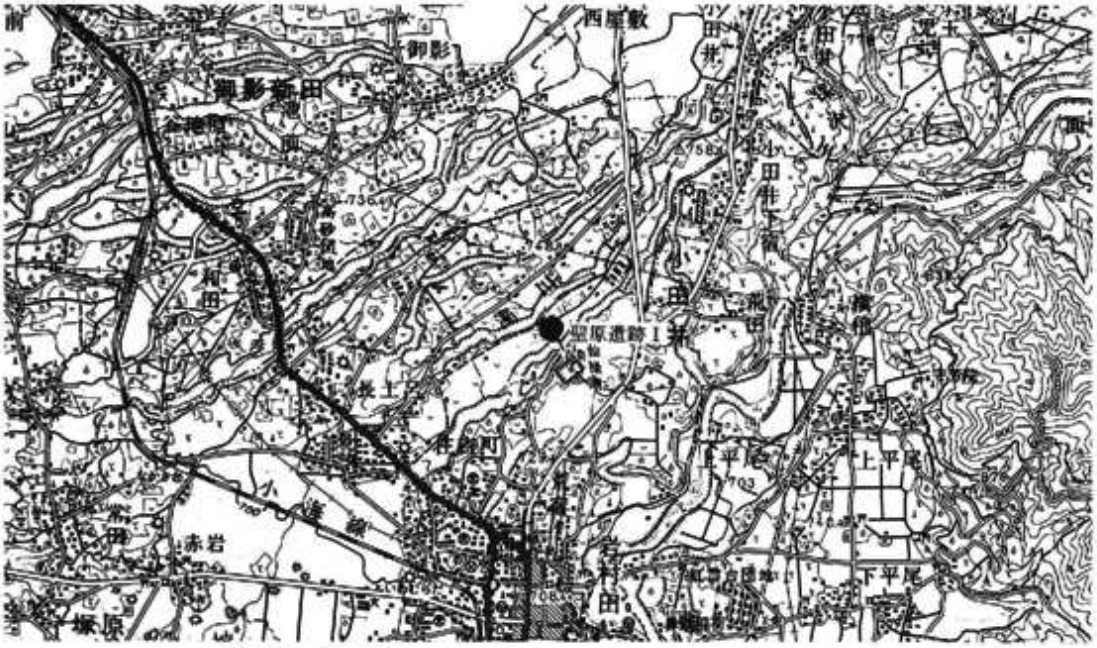
第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至る動機

聖原遺跡Ⅰは佐久市の北部、浅間山南麓末端部の南西に放射状にのびる田切り地形に挟まれた台地上に位置し、標高734～742m付近を測る。

昭和63年度、当遺跡の南西端に接する上聖端遺跡で4700㎡の調査を実施しており、住居址47棟、掘立柱建物址22棟などを検出している。これらの集落は、７世紀～８世紀初頭と８世紀末～９世紀前半にかけて二段階の集落展開が予想されており、また同年、佐久市教育委員会によって行われた60000㎡にわたる大規模な試掘調査により、当遺跡内においても同密度の集落址の存在が確認された。このことから当遺跡には、７世紀～９世紀にかけて佐久市でも有数な大集落址が存在しているものといえよう。

今回、佐久市の佐久流通業務団地造成に伴い、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となった。そこで佐久市教育委員会が佐久市土地開発公社より委託を受け、佐久市教育委員会より委託を受けた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施することとなった。



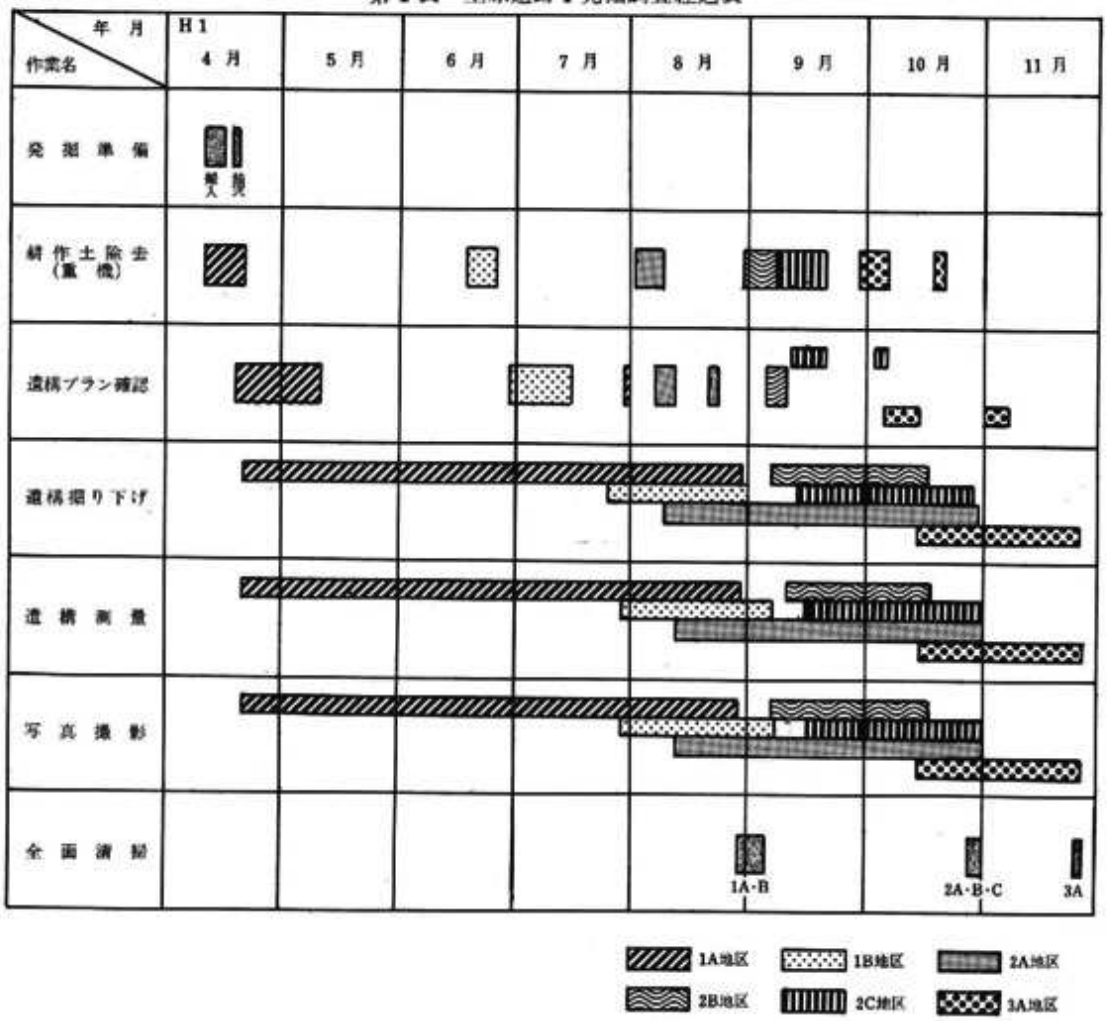
第１図　聖原遺跡Ⅰの位置（１：50,000 国土地理院地形図による）

第2節　調査日誌

本調査は、昭和63年度に行われた上聖端遺跡の調査結果および同年佐久市教育委員会によって実施された本遺跡内60000㎡にわたる試掘調査を基礎データとして計画を立案した。4月10日より重機により表土の除去作業を開始し、4月17日には結団式を行い本格的な調査に入った。

調査区は約33000㎡を3地区に分け、さらに1A・B、2A・B・C、3A地区の6地区に分割し、上聖端遺跡に接する西端部より調査を行った。11月28日の現地調査終了までの約8カ月間にわたる地元の人々の絶大な協力により本年度調査予定地区約33000㎡の大発掘調査を完遂し得た。また、10月28日には地元住民を対象とした現地説明会を実施し、本遺跡の重要性を広くアピールする活動も行った。

第1表　聖原遺跡I発掘調査経過表



本調査の詳細な経過については第１表にまとめてあるので参照されたい。

現地調査終了後、12月から遺物水洗い・保存処理、遺構図面の整理等の作業を行い、基礎資料の作成を継続中である。

第３節　発掘調査の方法

聖原遺跡の調査対象面積は約72300㎡にもおよび、そのうち平成元年度調査地区である聖原遺跡Ｉは面積約33000㎡という広大なものである。そのため本調査に先立ち、佐久市教育委員会により約60000㎡を対象とした大規模な試掘調査が実施された。

本遺跡で予想された主な遺構は、上聖端遺跡の調査結果および試掘調査の結果から７世紀から９世紀代の大集落址と考えられたため、これらの集落の構造・性格・変遷を究明することを主眼とし、竪穴住居址・掘立柱建物址およびそれらに付属する遺構に主力を置いて調査を行った。

調査区は今年度調査対象地区を１Ａ・Ｂ、２Ａ・Ｂ・Ｃ、３Ａの６地区に分割し、西端の１Ａ地区より順次調査を行った。グリッドは、調査区全体を網羅するように国家座標を組み、国家座標に沿って200m×200mの区画を設けてＩ・II・III…地区とし、各々を25区分した40m×40mの区画をＡ・Ｂ・Ｃ…Ｙ区とした。さらに、それを100区分した４ｍ×４ｍのグリッドを設定し、東西列を東からあ・い・う…こ、南北列を北から１・２・３…10とし、各グリッドの北東交点をそのグリッド名とした。また、遺構の名称については、上聖端遺跡からの通し番号とした。

今回、本遺跡を発掘調査するにあたり、次の調査方法を基本として調査を実施した。

○竪穴住居址は十字にサブトレンチを入れることを基本とし、掘り下げに際しては層位調査に努める。

○住居址は、カマドの中軸線とそれに直交する軸に沿って四分割し、北側から反時計回りにＩ区・II区・III区・IV区とした。

○南北サブトレンチはカマドを縦断する位置に設定し、カマド構築材を残存する部分まで掘り下げを行う。

○Ｉ区・III区掘り下げの後、土層断面写真の撮影を行う。

○遺構の実測方法は、簡易遣り方実測を基本とする。

○竪穴住居址における掘り方の土層観察は、十字にサブトレンチを入れることを基本として行った。

○本遺跡の基本土層及び遺構覆土等の観察における色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に基づいて行った。

第II章　遺跡の立地と環境

第１節　佐久市長土呂付近の自然環境（地形と地質）

本遺跡は、佐久市の最西北端の芝宮遺跡群・周防畑遺跡群の南方に位置している。この付近一帯は北方にそびえる浅間火山の噴出物によって地質構成されている地帯で、この地域環境を記載するには先ず浅間山の構成から始めなければならない。

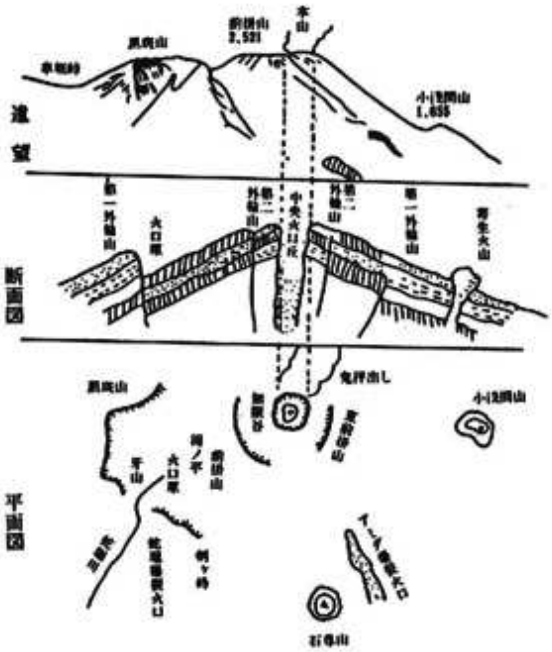
浅間山は、群馬・長野県境の上信越高原国立公園の最南端にある火山国日本のなかにおいても珍しい代表的な活火山で現在も盛んに噴煙を上げていることで知られている。それに加えて研究史の長いこと、火山活動の記録が古くから残されていること、火山形態が各面から具備していることなどにもよりわが国東西交通の要路中仙道・信越線沿いにあり、活動している火山として時に大噴火をして周辺に災害を及ぼすこともあり、四季の風望の変化のすばらしさなどによって古来文学絵画の対象ともなり多くの作品も残されている。

浅間山は、黒斑山・前掛山・中央釜山の三重式成層火山で標高2560m、四方からの眺望の変化があり、しかも常に噴煙を上げ続けているので人目につき易いが、特に南方佐久市側から見渡す形態が実にすばらしい。

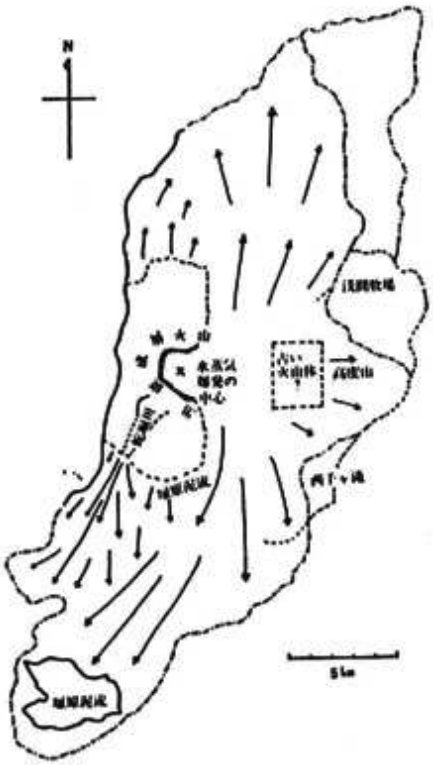
火山構造も含めて図示したものが第２図であるがコニーデ型の裾野と三重式噴火口寄生火山火口瀬など火山の模型を見るようである。しかも噴煙は上空の偏西風によって東に傾くことが多いため大噴火による災害も南側には及ばないのが現状である。

しかし長い火山活動の歴史をたどってみると、南方佐久市側にも噴火の状況を語る噴出物溶岩火山灰火山砂礫の堆積層が多く残されている。浅間山は我が国の火山としては最も新しい若い火山で第１次黒斑火山の活動を開始したのが新生代第四紀洪積末期であるが黒斑火山最盛期には単式成層火山で標高2800mを越える大型火山であった。その整然とした大火山は噴火口の東半分以上を破壊する大爆発によってその山体を失ってしまった。

その時の噴出溶岩熱水泥流の大部分が主として南方に流下して佐久市中佐都付近まで押し出している。その堆積物は現在ＪＲ中佐都駅付近を中心として塚原・赤岩・平塚部落付近の田園地に散在し、松島湾に浮かぶ松島のように並んでいる泥流残丘である。基盤整備以前はその数100を超す大小残丘が浅間山頂方向から放射状に並んでおり地名の起源にもなっている。岩質の研究結果から黒斑岩壁に残っている岩石と同一であることが実証されている。



第２図　浅間山の形態と構造(白倉原図)



第３図　黒斑山東部の破壊によって生じた塚原泥流の流下した状態を示す図（荒牧重雄著『浅間火山の地質』による）

その破壊された黒斑火山の中心から再び活発な火山活動が再開されたのが前掛山に成長するわけであるが、その過程の長い期間における多量な噴出物である軽石流火砕流（熱火山灰砂軽石溶岩流）と降下火山灰砂が少なくとも二回以上に亘って佐久市北半部浅間火山南麓に厚さ20～30m以上堆積した。

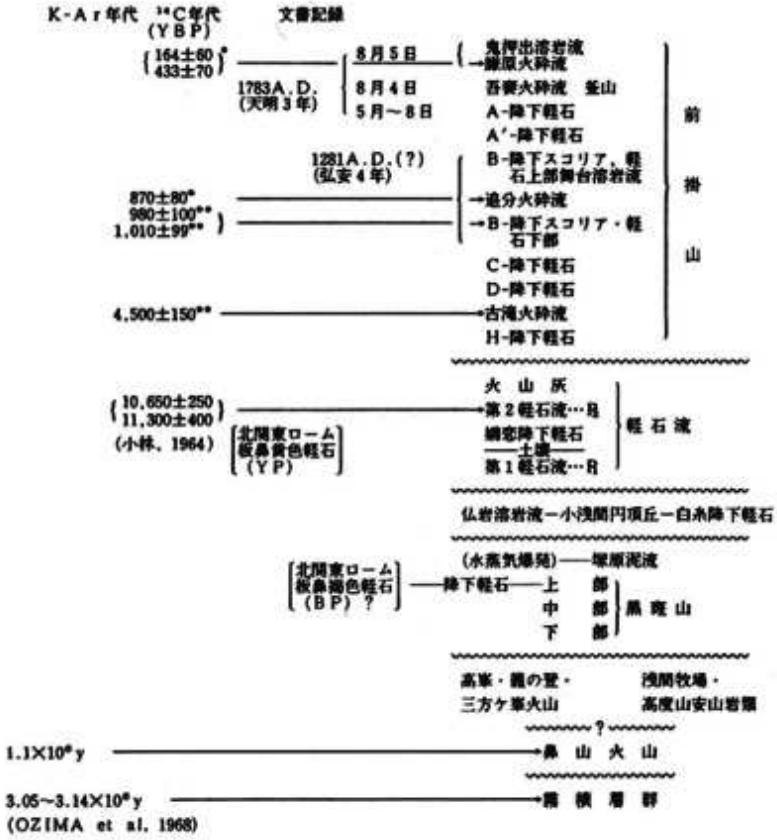
これは浅間山の南面追分原以南・佐久市中込原、西端は小諸市懐古園西まで広範囲にわたって約223㎢に分布し、佐久平北半部の生活地表面を形成して第一・第二軽石流と呼ばれている（第一軽石流をP_1層、第二軽石層をP_2層と命名されている。）。

この軽石流は南東面の湯川を埋め、一部に湖沼状態も作り湿地水中堆積層も各地に作り浅間火山南麓面の凸凹地形面を平坦化した。

この大規模な第一軽石流P_1と小規模な第二軽石流P_2は南方中込原で尖滅している。P_1とP_2の間隔があった事を物語る20m内外の黒土層が各所の田切り断面で確認されている。この軽石流P_1・P_2の地表面は火山灰砂軽石の堆積層で火山から噴出したままのもので固結凝集が不十分であるために、水の浸食には頗る弱く豪雨洪水には地形面に大きな変化を受ける。従ってこの地帯には火山山麓特有な地形“田切り”が多く見られる。浅間山麓標高1000m内外に分布する湧水（湧玉・濁り・白糸・千ケ滝）火山瀬蛇掘川などの浸食作用がこれにあたるわけである。湯川の谷も田切

りの最大なものを見ることができるが、浅間山麓から佐久平にかけて田切りの深い谷はその数大小合わせて50を越えている。田切りは山麓湧水地下水の流下流路ともなっており、弥生時代以来この周辺の標高750m以下の稲田耕作を支えてきたとも考えられ、田切りの分布と遺跡分布・古い集落分布には深い関係が見られるようである。

第2表　浅間火山を中心とした編年
（荒牧重雄著『浅間火山の地質』による。一部加除）



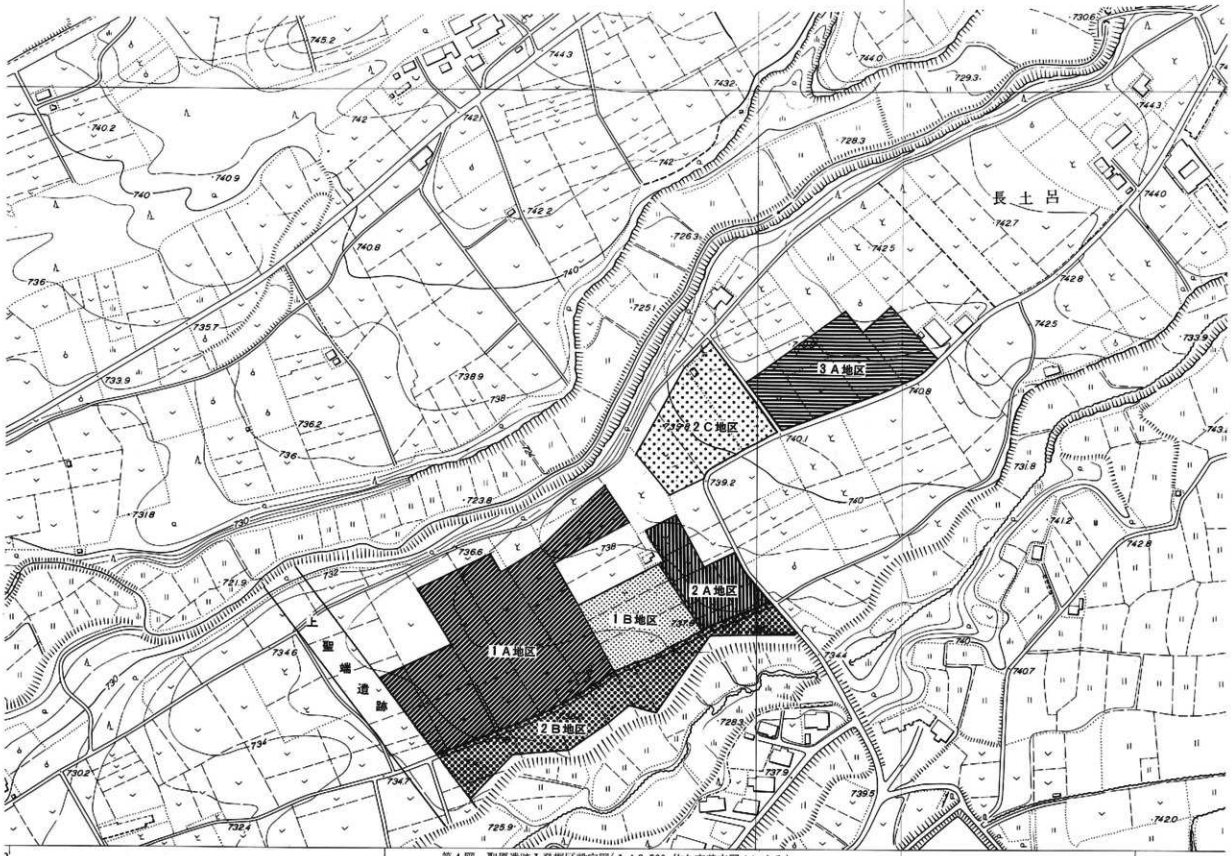
聖原遺跡はこの田切り密集地帯にある。濁りの田切りの谷幅は約100m、北西方向小諸市境の大田切りは谷幅150mを越し、谷底に御代田町からの湧玉用水が流れており何れも谷底には古い水田が拓かれ、下流300m付近からは肥沃な中佐都美田地域に続いている。長土呂部落の地名の起原もこの低湿地に基づくと言われている。

（白倉盛男）

参考文献

1　白倉盛男　1971　『浅間山と火山博物館』　小諸市立火山博物館

2　荒牧重雄　1968　『浅間火山の地質』　地学団体研究会



138°28′50″

第4図　聖原遺跡Ⅰ発掘区設定図(1：2,500 佐久市基本図4による)

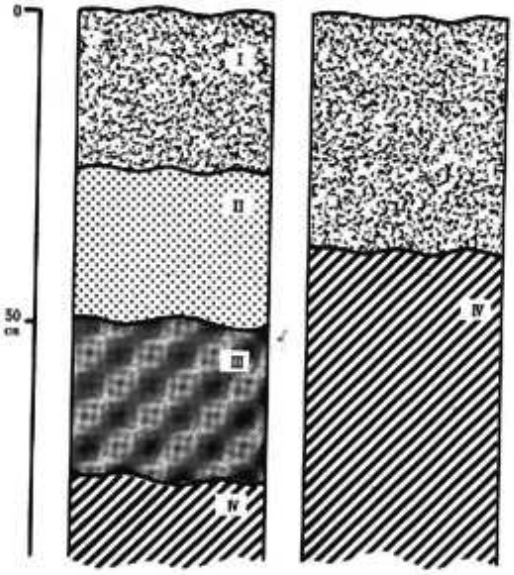
第Ⅲ章　基本層序

聖原遺跡の存在する長土呂遺跡群付近は、御代田方面から南西にのびる田切り地形が非常に発達しており、この田切りに挟まれた台地上には東から栗毛坂遺跡群・枇杷坂遺跡群・長土呂遺跡群・芝宮遺跡群・周防畑遺跡群・近津遺跡群・西近津遺跡群などが展開しており、佐久市でも有数な遺跡群が密集している地域である。

聖原遺跡は長土呂遺跡群のほぼ中央部に位置し、標高734～742m付近を測り、南西に向かって緩やかに傾斜している。また、両側の田切りとの比高差は10～15mを測る。

聖原遺跡における基本土層は、大半が第Ⅰ層耕作土直下が第Ⅳ層浅間第一軽石流であり、台地の中央部には上聖端遺跡で見られた浅い谷部が続き、黒色土（第Ⅲ層）が堆積する。また、２Ａ地区の南端から台地南側縁辺部付近には、砂層（第Ⅱ層）・黒色土（第Ⅲ層）が見られ、台地の縁辺部に向かって厚く堆積する。遺構確認面は大半が第Ⅳ層であるが、部分的に第Ⅱ層・第Ⅲ層である。

第Ⅰ層　暗褐色土層（10ＹＲ３／３）
　　耕作土
第Ⅱ層　砂層
第Ⅲ層　黒色土層（10ＹＲ２／１）
第Ⅳ層　明黄褐色土層（10ＹＲ７／６）
　　浅間第一軽石流



第５図　聖原遺跡Ⅰ基本層序模式図

第Ⅳ章　調査の成果

第１節　検出された遺構・遺物

遺構

		竪穴住居址	掘立柱建物址	土　坑	粘土坑
１Ａ地区	(13300㎡)	162棟	91棟	90基	１基
１Ｂ地区	(3300㎡)	39棟	25棟	15基	６基
２Ａ地区	(2500㎡)	33棟	16棟	28基	６基
２Ｂ地区	(5000㎡)	41棟	３棟	26基	１基
２Ｃ地区	(4400㎡)	40棟	53棟	16基	１基
３Ａ地区	(4500㎡)	81棟	54棟	13基	
計	(33000㎡)	396棟	242棟	188基	15基

（遺構数については今後の検討により若干の増減あり）

遺物

土　　器　縄文土器
　　弥生土器
　　土 師 器　壺・甕・坏
　　須 恵 器　長頸壺・短頸壺・甕・円面硯・高盤・坏
　　灰釉陶器　椀・皿
　　緑釉陶器　皿・小瓶
石　　器　打製石鏃・打製石斧・磨製石斧
鉄 製 品　鉄鏃・刀子・鍬・鋤・鎌・紡錘車・鉸具・巡方・鈴
銅 製 品　巡方・鈴
石 製 品　石印・紡錘車・砥石・こも石・白玉・管玉・石製模造品
貨　　幣　神功開宝・隆平永宝・富寿神宝・承和昌宝　他
人骨・獣骨

第２節　遺構の概要

１）竪穴住居址（第６・７図）

今回の調査で検出された竪穴住居址は、総数396棟に及ぶ。前年度調査された上聖端分をあわせると438棟という膨大な数になる。整理作業が終了しない現時点において、これらの住居址を時代別に区分してその概略を述べることは何ら意味を有さないかも知れないが、あくまでも現時点での成果として調査時の所見を基に、これらの住居址を各時代毎に概観していきたい。

古墳時代の住居址　７世紀を遡る住居址は検出されておらず、当遺跡における最古の集落はこの時代に営まれたものと思われる。相対的に大規模な住居が多く、カマドに対する南壁中央に出入口施設と考えられている、この時期に特徴的にみられる方形の張り出しを持つものが多い。カマドは、北壁中央部分に構築される場合がほとんどで、袖部分の地山を削り残して、その先端部に石を埋設した後、その上に石を載せ天井石とし、さらに粘土で被覆したものが一般的である。柱穴は４本が均等に配置され、壁溝・カマド脇の土坑を有する例が多い。

奈良時代の住居址　規模の規格化、集落展開の規則性が最も強く認められる時代である。前代に見られた張り出しは認められず、同等の性格を有すると思われるピットを南壁下中央に持つものが多い。カマドの位置は前代と変化しないものの、袖全体を地山から削り出す手法は見られなくなり、袖基部のみを削り残すものが認められるが、石・土器片等を芯材として用い、これを粘土で被覆するものが一般的である。柱穴は前代同様４基が均等に配置され、壁溝を有するものも多いが、カマド脇の土坑は一般的ではない。

平安時代の住居址　当遺跡において最も多くの住居が営まれた時代であるが、今後の整理に伴い詳細な時期区分がなされていけば、同時存在した数は前代と比べて少ないかもしれない。所謂「かわらけ」・羽釜を土器セットに含む、南東隅にカマドが構築される住居址群が当遺跡における最終段階の集落を構成したものと推測されるが、それ以外のものは、前代同様の北壁中央部分にカマドが構築される場合が一般的である。特徴的な構造を持つものとして、煙道部分に土師器甕を３～４個連ねて煙管としたものや、カマド本体が壁外に大きく張り出す構造のもの、構築材が粘土主体ではなく石主体のもの等が認められるが、遺物の検討がまったく行われず、詳細な時期区分がなされていない現時点において、その変遷過程は明らかではない。柱穴についても様々なパターンが認められるが、カマド同様に変遷過程を記述することは現時点では不可能である。

以上、今回検出された住居址群の概観を行ったが、詳細な時期区分、竪穴住居址の累計化、付属施設の変遷過程の検討等は、本報告に譲りたい。　（小林）

2）掘立柱建物址（第８・９図）

今回調査の実施された聖原遺跡Ｉからは、総数で242棟の掘立柱建物址が検出され、上聖端遺跡で検出された22棟をあわせると264棟に及ぶ。これらの掘立柱建物址は、台地の縁辺部において減少する傾向が認められるものの、今回の調査区ほぼ全域にわたって検出された。形態は総柱式と側柱式に分類されるが、側柱式のものが圧倒的に多い。総柱式のものは一辺４ｍ前後の方形プランを呈し、２間×２間で中央に１本の柱が配されるものが主体的であるが、第９図に示したように２間×３間で中央に２本の柱が配され、さらに柱穴が溝によって連結されるものも存在する。側柱式のものは、長辺４～５ｍ、短辺３～４ｍで２間×３間のものを基本的な形態とするが、１間×１間で一辺２ｍ前後の方形プランを呈する小形のものから、８間×６間で長辺約９ｍ、短辺約6.5mの長方形のプランを呈する大規模なものまで様々である。

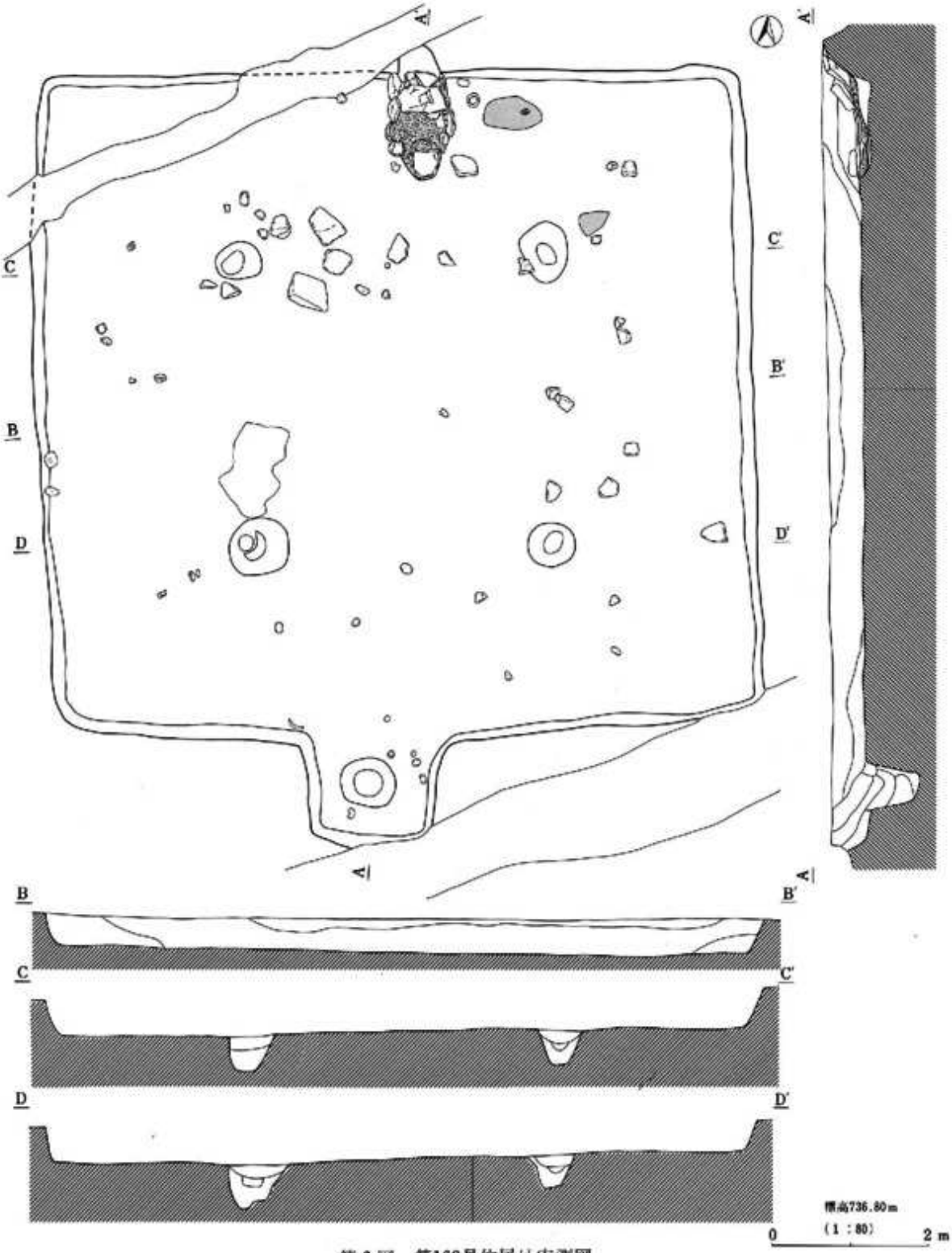
柱穴は、径50㎝～80㎝前後の円形を呈するものが主体であるが、隅丸方形を呈するものもわずかに存在する。また、柱穴を溝によって連結された溝持ちのものも多数検出された。溝の形態については様々なパターンが認められ、現段階においてその類型化および変遷過程について述べることは不可能であり、今後の検討課題としたい。

3）土坑

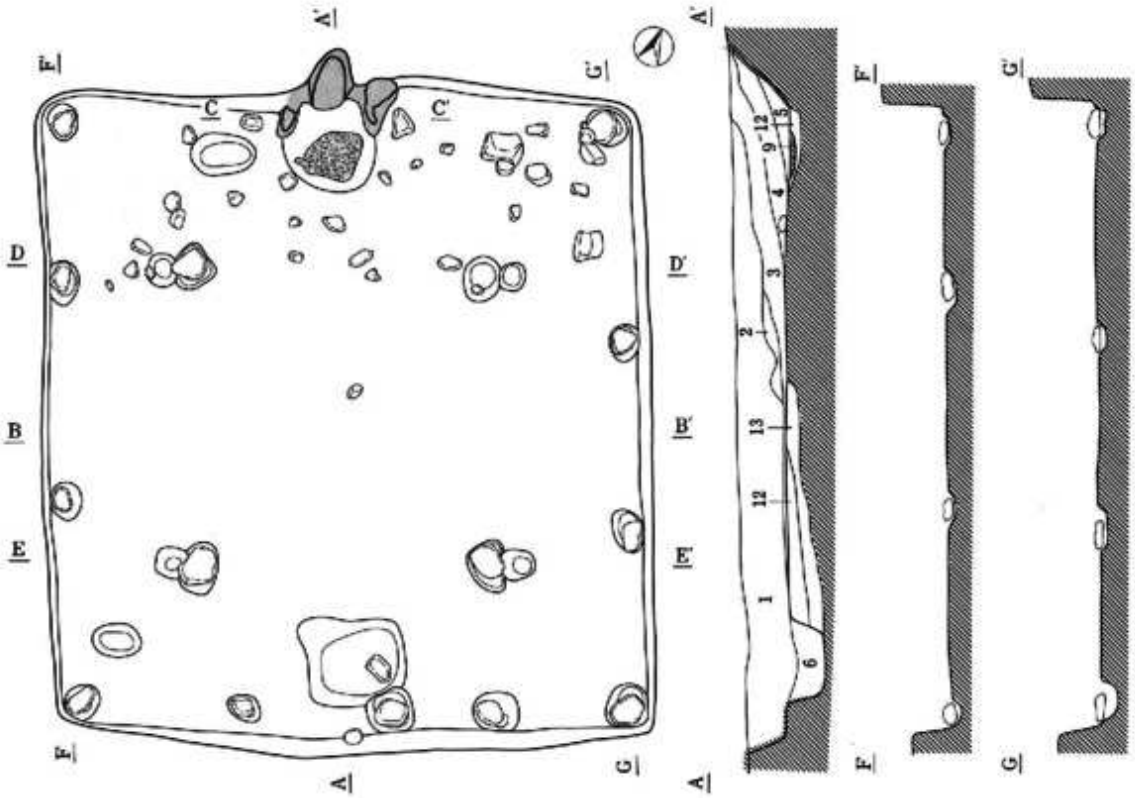
今回の調査区のほぼ全域から大小様々な土坑が検出された。総数は188基を数える。これらの土坑のうち性格が特定できるものに「おとし穴」がある。おとし穴は総数で22基検出された。長径150㎝、短径80㎝、深さ100㎝前後を測る楕円形のプランを持ち、底面には２～４個のピットを有する。この他、径２～2.5mの円形で、深さ1.2mの摺鉢状で二段落ちの断面形を有する大形の土坑が数基検出され、上聖端遺跡においても１例見られる。出土遺物は土師器甕、須恵器坏等があり、さらに礫・獣骨を伴うものもある。これに類似する土坑は、佐久市内で池畑遺跡・宮の上遺跡に見られ、特に池畑例では５個体分の馬、１個体分の牛の上・下顎骨等が礫と共に出土し、牛馬を使った雨乞等の呪述的な農耕の祭りが推測されている。本遺跡例もこれと近似した性格を有する可能性も考えられるが現段階では明確ではない。

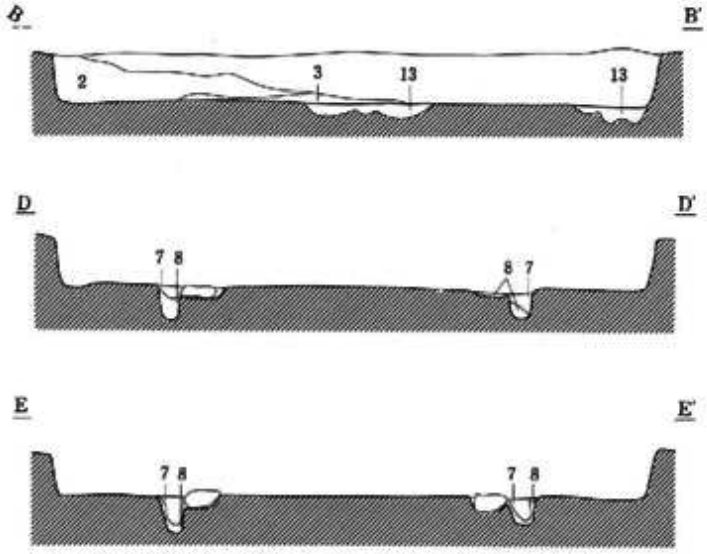
4）粘土坑

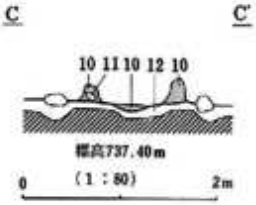
カマドに使用された粘土を採掘した跡と考えられ、15基検出された。規模・形態に企画性は見られず、一定しない。また、底面も凹凸が著しい状態である。今回の調査で初めて検出された遺構であり、今後の検討が必要である。（三石）



第6図　第162号住居址実測図

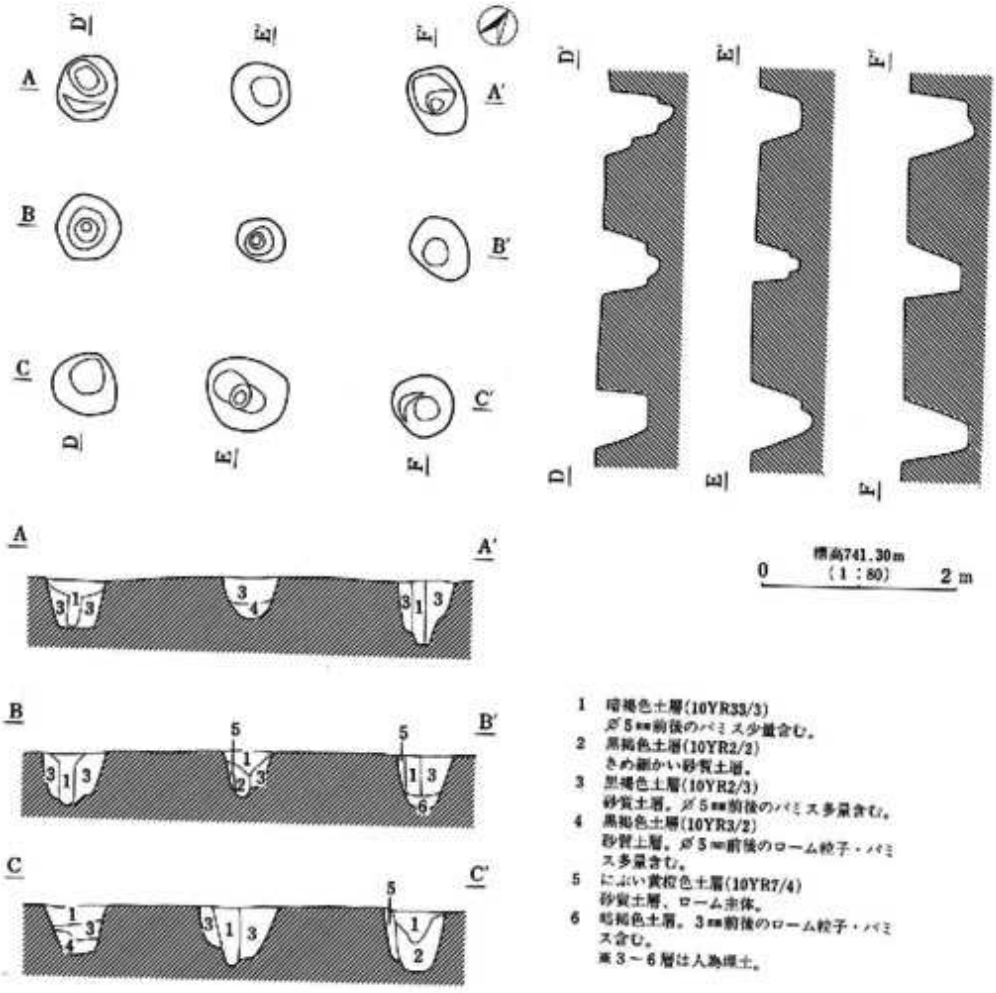




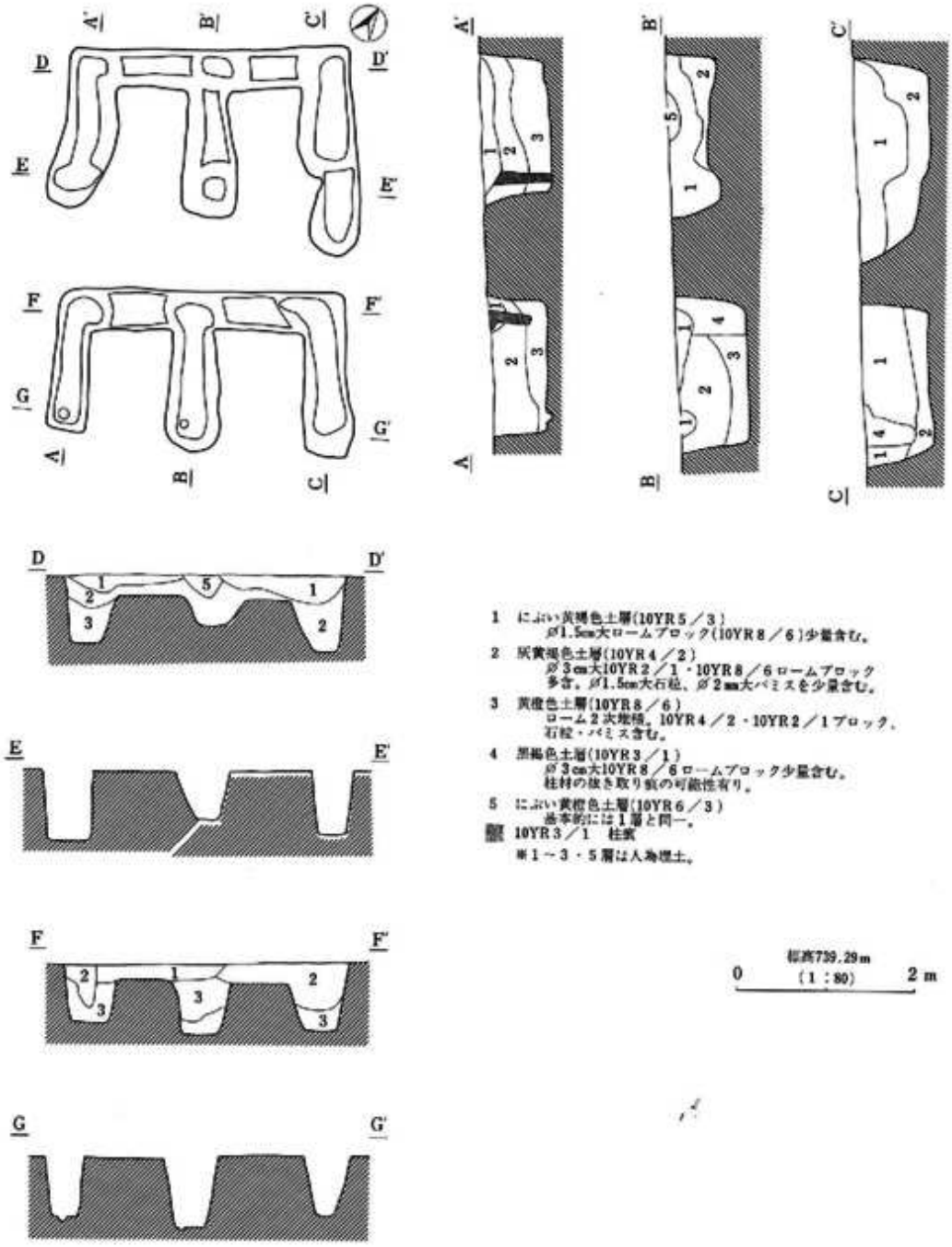


1　黒褐色土層(10YR 2／3)
　　φ2～3mm位後のパミス含む。
2　黒褐色土層(10YR 3／2)
　　パミスわずかに含む。
3　黒褐色土層(10YR 2／3)
　　1層よりやや黒く、パミス少量含む。
4　黒褐色土層(10YR 3／2)
　　橙色・白色粘土多量、炭化物少量含む。
5　褐灰色土層(10YR 4／1)
　　橙色・白色粘土多含。カマド崩落層。
6　暗褐色土層(10YR 3／4)
　　粘土ブロック・ロームブロック含む。
7　黒褐色土層(10YR 2／3)
8　黄褐色土層(10YR 5／6)　ローム主体。
9　橙色土層(5YR 7／8)　焼土層。
10　橙色土層(25YR 7／8)
　　カマド構築粘土層。
11　にぶい黄褐色土層(10YR 5／3)
　　砂質土とローム融合。しまりあり。
12　にぶい黄橙色土層(10YR 6／4)　人為堆土
13　灰白色土層(10YR 8／2)　人為堆土

第7図　第252号住居址実測図



第8図　第232号掘立柱建物址実測図



第9図 第216号掘立柱建物址実測図

第3節　まとめ

聖原遺跡は佐久市の北部、浅間山南麓末端部地域に所在する。この地域は御代田方面から南西にのびる田切り地形が非常に発達しており、この田切りに挟まれた台地上には東から栗毛坂遺跡群・枇杷坂遺跡群・長土呂遺跡群・芝宮遺跡群・周防畑遺跡群・近津遺跡群・西近津遺跡群などが展開しており、佐久市でも有数な遺跡群が密集している地域である。

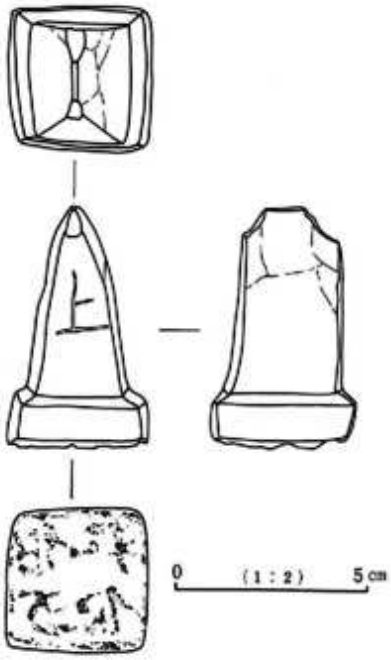
聖原遺跡は長土呂遺跡群のほぼ中央部に位置しており、佐久流通業務団地造成事業に伴う発掘調査面積は約72300㎡という広大なものである。このうち、今年度調査を実施した聖原遺跡Ⅰは、面積約33000㎡、検出された遺構は竪穴住居址396棟、掘立柱建物址242棟で、昭和63年度に実施された上聖端遺跡とあわせると、住居址438棟、掘立柱建物址264棟にのぼり、出土した土器は約300箱という膨大な数である。現在の整理状況は遺物の水洗い作業と遺構図面の整理を行っている段階であり、遺物についての検討はまったく行われていない状況である。したがって本概報は現段階での遺構を中心とした若干のまとめであり、また、遺構数についても今後の検討により変更のあることを了承して頂きたい。

本遺跡群内での発掘調査は、昭和63年度に上聖端遺跡・上大林遺跡・下聖端遺跡、平成元年度に聖原遺跡Ⅱの調査が佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センターによって行われている。各遺跡から検出された住居址は上聖端遺跡47棟、上大林遺跡１棟、下聖端遺跡12棟、聖原遺跡Ⅱ８棟の68棟であり、いずれも古墳時代後期から平安時代に位置付けられている。また、昭和63年度に行われた試掘調査結果からも、本遺跡内において該期の集落展開が予想された。今回の調査で検出された396棟の住居址群の詳細な時期区分については、遺物の整理が行われていない現時点では明確ではないが、古墳時代後期から平安時代にかけての大規模な集落址であると考えられる。今回の調査では、平安時代の住居址が最も多く検出されているが、所謂「かわらけ」・羽釜を土器セットに含み、南東隅にカマドを持つ住居址が存在することから、今後の整理によって詳細な時期区分がなされていけば、さらに細分されるものと思われる。各時代毎の住居址の概観は前述したが、各住居址の詳細な時期区分、住居址の類型化、カマドなどの付属施設の変遷過程、さらに住居址の分布状況等の検討は、今後の報告書作成の際に行っていきたい。

掘立柱建物址は、今回の調査で242棟が検出された。これらの分布状況は、台地の縁辺部においては若干減少する傾向が認められるものの、今回の調査区ほぼ全域から検出された。また、その形態は、総柱式と側柱式とに分類され、さらに単独の柱穴で構成されるものと、柱穴が溝によって連結される所謂「溝持ち」のものとに区分される。溝の形態については、２本の柱穴を連結するもの、桁列の柱穴が連結されるもの、溝によって全周するものなどの他様々なパターンが存在

しており、形態の類型化・時期区分、また、集落内における掘立柱建物址の位置関係等については今後の検討が必要である。

遺物については現在、土器の水洗い作業を継続中であり、まったく検討が行われていない状態である。そのなかで、特筆すべき遺物として石製の私印(第10図)がある。私印を出土した第255号住居址は、北側の主柱穴が北壁中に位置しており、南北長約390cm、東西長約460cmを測る比較的小型の住居址で、平安時代前葉と考えられる。印は縦3.3～3.5cm、横3.4～3.5cmで正確な方形ではなく、高さ6.2cmである。遺存状態は縁および字に欠損が多少見られ、印面は水平面を形成しているとは言い難く凹凸があり、現在使用している印の使い方とは若干異なるのではないかと思われるほどである。また、朱等の付着物は肉眼では観察できなかった。奈良国立文化財研究所に鑑定していただいたところ、律令体制時の石製の印は全国的にも珍しく、「伯万私印」つまり“伯万呂”という有力者の私印であろうとのことである。

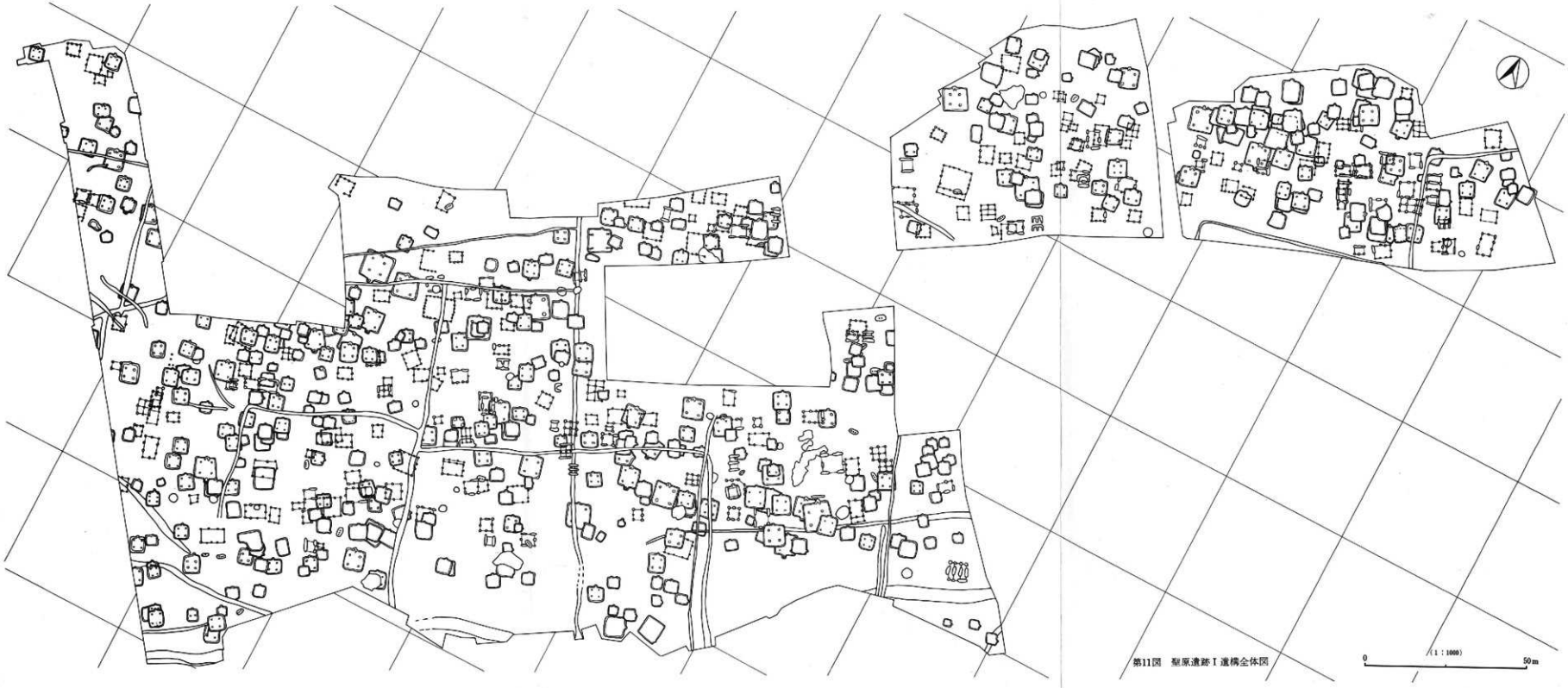


第10図　石製私印実測図

土器類は極く少量の破片を除き、古墳時代後期から平安時代に限定され、約300箱を数える多量の土器が出土した。器種的には土師器・須恵器・灰釉陶器が認められ、その多くは壺・甕・羽釜・坏・椀・皿などの日常雑器によって占められている。このうち、特殊なものとして須恵器高盤・円面硯、「小郡」をはじめとする多量の墨書土器、さらに緑釉陶器皿・小瓶等がある。また、金属製品では鉄製の鉸具・巡方、銅製の巡方等、さらに、皇朝十二銭（神功開宝・隆平永宝・富寿神宝・承和昌宝）をはじめとする貨幣がある。この他、鉄製品には鍬・鋤・鎌・鉄鏃・紡錘車などの農具・武具等が出土している。

以上、調査途中の現段階での簡単なまとめを行ったが、今回のような大規模な発掘調査を実施することが真の埋蔵文化財の保護になるとは考えられないものの、少なくとも調査・研究の進展・成果によって困難と思われる、一般集落の保護にも活路を見いだすべきであると考えられ、一日も早く開発と保護の調和のとれた接点を見いだす努力をしていく必要があろう。

（三石）



第11図　聖原遺跡Ⅰ遺構全体図

図版一

1．聖原遺跡付近航空写真（株式会社協同測量社撮影）

図版二

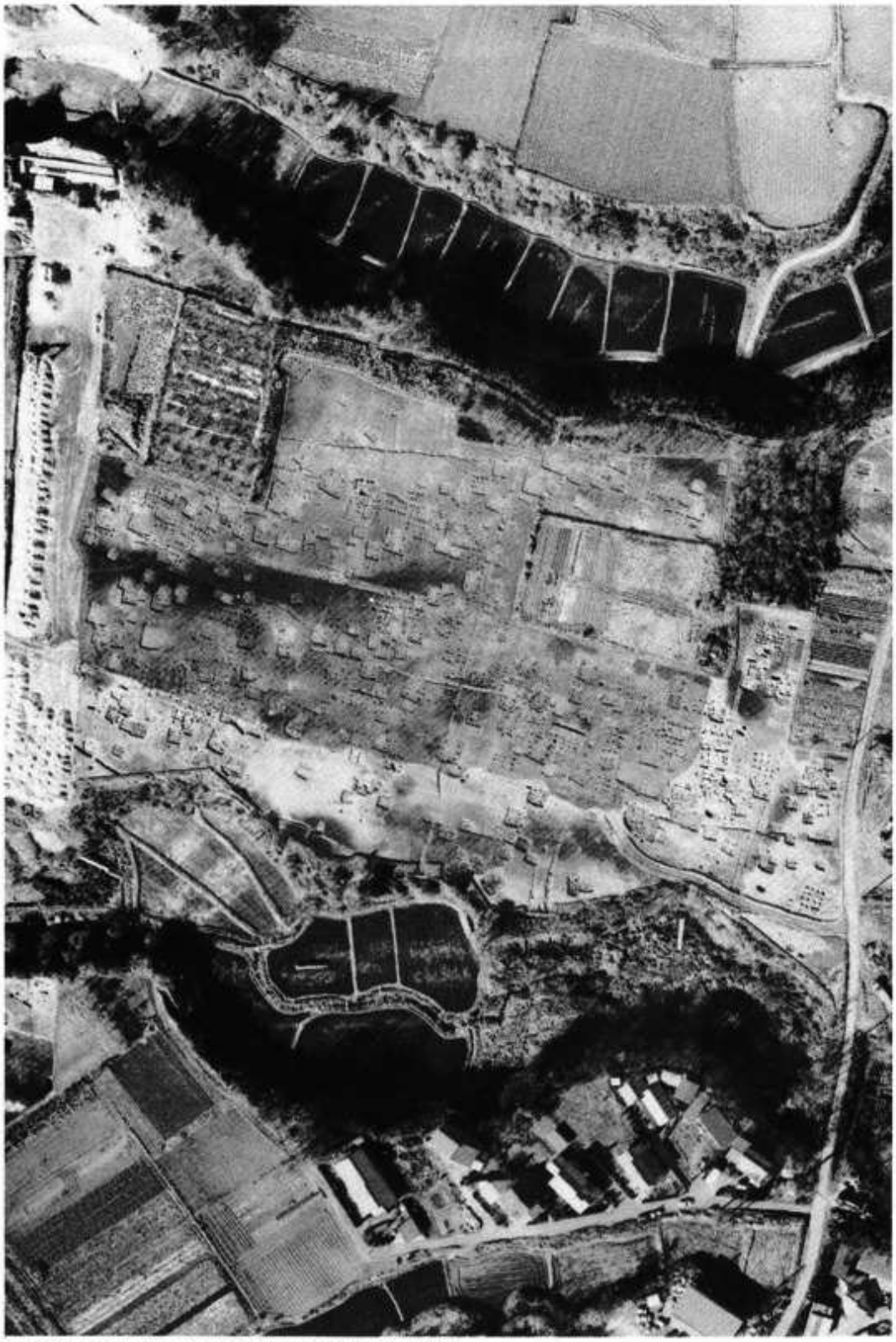
1．聖原遺跡付近航空写真（南方より）（株式会社協同測量社撮影）

2．聖原遺跡付近航空写真（西方より）（株式会社協同測量社撮影）

図版三

1．聖原遺跡Ⅰ航空写真（南西より）（株式会社協同測量社撮影）

2．聖原遺跡Ⅰ航空写真（南方より）（株式会社協同測量社撮影）



1．聖原遺跡Ⅰ全景写真（南東より）（株式会社協同測量社撮影）

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第1集	『西裏・竹田峯』（TNU　NTM）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第2集	『池畑・西御堂』（YIT　YMM）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第3集	『芝　　間』（ISM）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第4集	『新　町　　II』（IIM）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第5集	『宿上屋敷　下川原・光明寺』（YKY　YSK）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第6集	『淡淵・屋敷前・西片ケ上・曲尾III・曲尾I』（KAB　KYM　KNU　KMOIII　KMOI）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第7集	『高柳町・西大久保』（ATM　SNO）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第8集	『北西の久保』（IKK）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第9集	『梨の木』（NNN）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第10集	『菅田III・新町III・宮の上・中曽根・藤塚』（IIS　IIMIII　YMM　INN　TFK）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第11集	『長峯古墳群』（UNM）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第12集	『西裕ぶた』（KNN）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第13集	『駒沢・鳥石』（NAZ　IET）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第14集	『龍の峯古墳群』（TNM）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第15集	『鷹巻・西大久保II　曲尾II』（SKM　SNOII　KMOII）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第16集	『荒田・上金井　東赤座II』（NAK　IHZ）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第17集	『駒沢II・発電所IV・梨の木II・宮の上II』（NAZII　IBZIV　NNNII　YMMII）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第18集	『森　　下』（INM）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第19集	『金井城跡概報』（ONK）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第20集	『南上中原・南下中原　上聖端概報』（NSM　NNK）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第21集	『鶴ヲネ』（KUZ）
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第22集	『菅田IV　東大門　中金井II』（IISIV　IIH　ONKII）

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第23集
長野県佐久市
長土呂遺跡群
聖　原　遺　跡　I
1990年3月
編集者　佐久埋蔵文化財調査センター
発行者　佐久市教育委員会
印刷所　信毎書籍印刷株式会社